

## 『風葉和歌集』一首入集散逸物語一覧：平安物語から中世物語へ・補遺

辛島，正雄

九州大学大学院人文科学研究院文学部門国語学国文学：教授：日本中世文学

<https://doi.org/10.15017/16865>

---

出版情報：文學研究. 107, pp.1-35, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 『風葉和歌集』 一首入集散逸物語一覽

——平安物語から中世物語へ・補遺——

辛 島 正 雄

筆者はさきに、「平安物語から中世物語へ——短編物語の位相——」（秋山虔編『平安文学史論考』二〇〇九年、武蔵野書院）所収）と題して、『堤中納言物語』所収の各編以外に、往時どのような短編物語が存在したのかを窺うべく、『風葉和歌集』所見の物語のうち、入集歌数一首の散逸物語に絞り、それが短編と認められるか否かについて、いささかの考察を加えることがあった。ただし、ここでは、紙幅の制約から、多少なりと新見を提示できそうな作品を優先させたため、最終的にリストアップできた全五〇作品のうち、じつさいに検討を加えることができたのは、一二作品にとどまった。そこで、本稿では、前稿では作品名を掲げるだけにした三八作品をも含めて、すべてを網羅したかたちでの一覽を、あらためて示しておくことにした。前稿において検討を済ませた作品には、見出しの作品名の下に「\*」を付し、それと分かるようにしたが、本稿の「二覽」としての性格に鑑み、それら一二作品についても、省略せずそのまま載せることにした。そのさい、加筆・補訂を行った場合は、「\*」の下にもうひとつ「\*」を付すことで、前稿から変更があることを示した。参考文献は前稿に掲げたとおりであ

るが、念のため再掲しておく。

【参考文献】

- ① 小木喬著『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』（一九七三年、笠間書院）
- ② 神野藤昭夫・原國人・藤井貞和「物語文学総覧700」（国文学 解釈と鑑賞）45巻1号、一九八〇年一月
- ③ 三角洋一「物語文学全覧」（別冊国文学）32号「王朝物語必携」一九八七年九月
- ④ 神野藤昭夫「散佚物語事典―鎌倉時代物語編―」（三谷榮一編『体系物語文学史 第五卷 物語文学の系譜Ⅲ 鎌倉物語2』一九九一年、有精堂）
- ⑤ 足立繭子・鈴木泰恵「散佚物語事典」（神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子事典』二〇〇二年、勉誠出版）

[1] 『秋の夜ながむる』\*

秋の暮に、法輪にまうでて、紅葉の水に流るるを見て

秋の夜ながむる少将

散り積もる紅葉ば流す水にこそ問ふべかりけれ秋の行方は

（巻五・秋下・三六一番。以下、『風葉和歌集』の引用は「岩波文庫」本による）

主人公の少将が、秋の暮れに法輪寺に参詣したこの場面が、題号の出所なのであろうか。「秋の夜」に「ながむる」ものは、「月」であることが一般的だが、「秋の暮」では月は夜が更けてからしか昇つてこない。そのせいか、ここでは、水に流れる紅葉を見ての詠となつている。その少将は、「秋の行方」を知りたいと思うのだが、ここに男女関係についての感慨が含まれているとすれば、少将のもとを去って行った女を、忘れ難く思っているのだ

あろう。わざわざ寺に参るといのは、かれがなにか悩みを抱えていたことを示唆する。なお、主人公が少将の地位にとどまる物語なので、かれの昇進を含むような長編とは考えにくい。とすれば、『花桜折る少将（中将）』や『逢坂越えぬ権中納言』『思はぬ方にとまりする少将』などと似た命名方式の短編であったか。『六条斎院物語合』に提出された諸編の命名法には、このタイプが多い。後世の歌ではあるが、『文保百首』に、

紅葉葉にけふのくるるもさそはればかぜにや秋の行へとはまし（七五四番。以下、歌集の引用は『新編国歌大観』による）

と、「秋の行方」を風に問う例がある。

[2] 『あしすだれ』\*\*

中宮の幼くおはしましける時よめる

葦簾の中宮亮

ひな鶴の沢辺にしばし休らふを雲の上まですだててしがな

（巻十・賀・七五五番）

中宮がまだ幼少のころ、のちに中宮亮となる男が、「雲の上まですだててしがな」と祈念し、それを実現させた物語であることからすると、かの女の幼少期から中宮に到るまでの経緯が描かれていたはずである。中宮亮は、幼少のおりからその成長を見守りつづけ、最後まで中宮に近侍しているので、乳母の夫でもあったか。何年にもわたる時間の経過を描くことのない『堤中納言物語』所収の諸編とは趣を異にするが、構想が単純なものであれば、中宮の榮達譚として、コンパクトな作品であった可能性もある。「あしすだれ」という題号に、「沢辺にしばし休ら」っていたころ（雌伏期）の、中宮のわび住まいの様子がしのばれる。「ひな鶴の」の歌の基底には『詩経』

小雅の「鶴鳴」が踏まえられていよう、とする指摘に従えば、そこからは、光源氏の須磨流謫への連想の糸の先に、明石姫君を意識した「中宮」の形象化を窺うことができるかもしれない（須磨に光源氏を慰問した頭中将が、別れ際に詠んだ「たづがなき雲居にひとりねをぞ泣く」〔②二一六頁。以下、『源氏物語』の引用は「新編日本古典文学全集」本による〕の歌が「鶴鳴」を念頭に置いたものであること、「新編日本古典文学全集」本の頭注ならびに付録の「漢籍・史書・仏典引用一覧」に指摘がある）。

[3] 『あじろ』

返事もせざりける女に遣はしける

網代の宰相

いはみがたいかがうらみぬ白波の返る跡さへ絶えぬと思へば

（卷十一・恋一・八二一番）

宰相が主人公であれば、これも、昇進とは無縁の短編である可能性が高い。題号「あじろ」がなにを示唆するものであるかは、詳らかでない。つれない女に対して、男が嘆き恨むという状況設定は、物語のいわば定番であり、『六条齋院物語合』には、端的に「……と嘆く○○」と題された物語が三作品もある。

[4] 『あふさか』

ほのかに御覧しける女の、単をたてまつり替へさせ給ふとて

逢坂のみかどの御歌

形見とてかく脱ぎ替ふる唐衣我ならざらむ人に重ぬな

（卷十二・恋一・八六五番）

女と逢ったのが、即位以前の身軽な時期だったのか、在位中のことなのかで、物語のイメージが多少変わってくる。在位中のこととすると、「我ならざ」る男と女との関係を承知しながら女と契りをもったとして、〈しのびね型〉の物語と見ることもできようか。題号「逢坂」は、女と契るこの場面にちなむものであろうか。

[5] 『あま入』

難波わたりにて見合ひける人の、宿を問ひ侍りければよめる

あま入の娘

白波の寄するなぎさに世を尽くす海人の子なれば宿も定めず

(卷十八・雑三・一三五三番)

『源氏物語』以前に成立していたと見られる古物語であり、その改作物語にお伽草子『あま物語』がある。都から来た男との身分差のある恋に絶望し、入水したあまの娘が、転生して、男と晴れて夫婦となる話である。『源氏物語』以降の物語に与えた影響は大きく、三角洋一著『物語の変貌』(一九九六年、若草書房)所収「『あま入』の成立と趣向」に詳しい。筆者にも、「明石」巻の「海人の子」をめぐる覚書——散逸『あま入』物語のことなど——(『文学研究』97輯、二〇〇〇年三月)、「撰集抄」所載平説話の成立をめぐる覚書——『源氏物語』と散逸『あま入』と——(『文学研究』98輯、二〇〇一年三月)がある。これを短編といえるかどうかは微妙だが、単純な構想の物語ではある。

[6] 『あれまく』

終りに望みて、善知識の心かなふべきこととて、七重宝樹の有様など説き聞かせ侍りければ

## 荒れまくの大納言の大君

七重なる植ゑ木を知らでもみぢ葉の八入になどか心染めけん

(巻七・釈教・五〇六番)

大納言の大君の、いわば辞世の歌。「もみぢ葉の八入になどか心染めけん」とは、これまでなにか世事に深く心を囚われていたことを反省する口吻だが、これが男との関係をいうのかどうかは、不詳。「大納言の大君」という呼称なので、未婚のまま死んだのであろう。題号「あれまく」からは、すでに指摘のあるとおり、『古今和歌集』巻十八・雑下の、

いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくをし(九八一番)

が想起される。大君は、古里の荒廃を惜しみ、その古里で生涯を全うしたものか。

## [7] 『石山』\*

心地限りにおぼえけるに、男の行く末を契り侍りければ

石山の大僧都の母

行く末をかけても何か契るらんだ目の前になりぬるものを

(巻十三・恋三・九四八番)

のちに大僧都になる男の母が、臨終の前に、今さら将来を約束しても手遅れだと、男を責める歌である。死因は出産で、このとき産まれたのが、のちの大僧都であったか。不幸な母の死が息子の発心の機縁となり、その後厳しい修行に耐え、大僧都にまで昇った、といったエピソードがあったと想像すれば、物語の中心は、大僧都の母と男とのままならぬ仲を描くところであり、母の臨終の場面がクライマックスだったのであろう。だとすると、構想としては単純な作品である。題号の「石山」は、この地で出産・臨終を迎えたことにちなむか。石山での秘

密の出産ということであれば、『夜の寢覚』第一部が想起される。

[8] 『いちひひろひ』

題知らず

いちひ拾ひの大納言の北の方

数ならぬしすが垣根の梅が枝に身をうぐひすの音をのみぞなく

(卷十六・雜一・二一五八番)

のちに大納言の北の方となる女が、卑賤の者の家にあつて、わが身の拙さを嘆く、というもの。『うつほ物語』の俊蔭女母子の、山中での貧窮生活を思い合わせるむきもあるが、そこまで極端な話ではあるまい。山里でのわびしい暮らしを想像させることばとして、「いちひ拾ひ」と命名されたのであろう。意外な場所に美女を見出すという、類型的な物語であつたか。

[9] 『うたたねの宮』

皇后宮の女房、菊合し侍りけるに、紫檀の長櫃に白き砂子を敷きて、色々に匂ひたる菊植ゑ渡し、隅々に立て石、洲浜などのさまして、鶴の形を作りて、黄なる薄様に葦手に書きて食はせける

よみ人知らずうたた寝の宮

菊の露落つる水際に棲むたづはいとどよはひぞ久しかるべき

(卷十・賀・七三四番)

右の歌の四首前に、『逢坂越えぬ』から、

中宮の根合に

よみ人知らず逢坂越えぬ

君が代の長きためしにあやめ草千尋に余る根をぞ引きつる

(卷十・賀・七三〇番)



として採られているのと、よく似たかたちになっている。『逢坂越えぬ』の場合、入集歌は物語の前半部の根合のうちに詠まれたものであるが、物語の眼目である後半部の展開を予測させるような情報は、含まれていない。『うたたねの宮』も同様であったとすると、菊合の催しを描いた部分とは別に、物語の眼目となる内容があったのであろうが、その詳細は不明である。

[10] 『梅めづる』

梅の花の白き、紅合はせ侍りけるに、紅の方にてよめる

梅めづるの宮の君

八重咲けどにほひは添はず梅の花紅深き色ぞまされる

(巻一・春上・三七番)

白梅と紅梅の優劣論争(梅合)で、紅梅に肩入れた宮の君という女房の歌。題号「梅めづる」が、この論争そのものを指すとすれば、その様子を描くことを眼目とした物語ということになる。物合や優劣論は、『源氏物語』中の趣向としてのみならず、さまざまな文献に登場するので、そうしたものをヒントに、例えば「梅めづる」中宮のもとで開催された梅合の熱気を再現したルポルタージュ風の作品、といったものも想像される。ならば、短編らしい趣向であるといえようか。

[11] 『うらみしらぬ』\*

金の使にて、陸奥国へ下りて上りけるに、かしこなる女に

恨み知らぬの所の衆

花かつみかつみてだにも恋しきに安積の沼をいかで行かまし

(巻八・離別・五六八番)

金の使として陸奥国に下った藏人所の下級役人が、その地の女と親しくなったものの、帰京の期日がきて、離れ難い思いを詠んだもの。離別の部に入っているので、都に伴うことはできなかつたのである。女は「恨み知らぬ」態度で、自分を残してゆく男を責めることもしなかつた、というのであろう。鄙の地を舞台とした、純朴な恋物語であつたか。すでに指摘のあるように、金の使として陸奥国に下つて行つた人物に、『大和物語』六九段・七〇段に語られる、藤原忠文のむすこが知られる。「童にて殿上して、大七といひけるを、かうぶりして、藏人所にをりて、金の使かけて、やがて親のともに」(三一六頁。以下、『大和物語』の引用は「日本古典文学全集」本による)陸奥国に下つたかれは、在京中、監の命婦と恋仲であつたが、監の命婦からやまももを贈られたとき、

みちのくの安達の山ももるともにこえばわかれの悲しからじを(三一五頁)

と詠んでいる。「花かつみ」の歌とは、男の向かう方向が逆であるが、いずれも岩代の名所を詠み込んで、女と別れてひとり旅することを嘆くという点で、共通する。この『大和物語』の逸話をヒントに作られた短編物語ではあるまいか。

[12] 『おい人のかたみ』

物思ひけるころ、木々の梢の青みわたれるを見て

老人の形見の源大納言女

人知れぬ嘆きはいつも絶えせねど萌え出づる春はわびしかりける

(巻十六・雑一・一一六三番)

源大納言が、高齢でようやく一女を授かつたものの、ほどなく逝去したため、娘はわびしい生活を余儀なくさ

れ、ことに父の亡くなった春がめぐり来るたびに、その不在ゆえの身の拙さが痛感された、というのであろうか。そのような娘の「物思ひけるころ」の「人知れぬ嘆き」とは、いずれ男との仲をいうのであろうが、それがどのようなものであつたかは、不明。娘に幸せは訪れず、未婚のまま物語は終わるのであろう。

[13] 『かたの』

殿の中納言、鷹狩りのついでに一夜泊まりて、またとも訪ひ侍らざりければ、身を投げむとしける所に  
て、鶉飼を見つけて、袴の腰を引き破りて、篝の松の炭して書いて、かの中納言に伝へよとて取らせ侍  
りける  
交野の大領が女

かつ消ゆる憂き身の泡となりぬともたれかは問はん跡の白波

(巻十四・恋四・一〇四八番)

『源氏物語』以前の著名な散逸物語である『交野の少将』と同一作品と見るべきか否か、意見が分かれる。『今昔物語集』巻二十二「高藤内大臣語第七」に伝える、鷹狩に出た藤原高藤が、その地の大領である宮道弥益の娘と結ばれる説話とよく似ており、無関係ではないと目される。

[14] 『紅梅』

みかど、せちにのたまはせける御返事に奉り侍りける

紅梅の関白の三の君

せきかぬる涙の色はまさるとも逢ふといふ名をいかが流さむ

(巻十一・恋一・七九六番)

帝の強い入内要請にも、頑として応じない関白の三女は、死去した姉の中宮(ないし女御)の妹でもあつたか。

だとすると、鎌倉物語の『風につれなき』とよく似た人物設定だが、「関白の三の君」という詠者表記は、かの女の身に境遇の変化がなかった、つまり『風につれなき』のような長編には仕立てられなかったことを示唆する。短編だったのであろう。「せきかぬる涙の色」は、姉の死を悲嘆する帝の涙であろう。『源氏物語』の巻名とかぶる題号であるが、とくに関連性は見られないようである。

[15] 『心やり』\*

娘のもとに時々訪れける男の、「秋は頼めしたのみあれば」と申して侍りける返し

心遣りの式部卿の宮の北の方

ひたぶるに音はせねども小山田のたのみむなくなさんものは

(巻十六・雑一・一二二七番)

男の求婚に、女の母親が許しを与える、というのだが、ここには、『伊勢物語』一〇段の面影があるように思われる。

むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。このむこがねにのみておこせたりける。すむ所なむ入間の郡、みよしのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに、君が方にぞよると鳴くなる

むこがね、返し、

わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ

となむ。人の国にても、なほかかることなむやまさりける。(一四三〜一四四頁。以下、『伊勢物語』の引用は「日

本古典文学全集」本による)

題号「心やり」は、夫の意向に従わず、自分の思うままに縁談をすすめようとする、北の方の態度を暗示するか。

[16] 『こざうしき』

さま変へて、日野といふ所にまかりける道に、花のおもしろかりければ

こざうしきの大納言女

この世をば憂しとて家を出づる身の花に心をとどむべしやは

(卷十六・雜一・一一七五番)

大納言の娘は、未婚のまま出家したのであろう。「こざうしき」は「小雑色(こざふしき)」で、身分違いの恋が原因で、女は出家に到つたものか。

[17] 『いせち』

忍びたる男の臨時の祭の舞人にて渡りけるに、車より扇をさし出でたりければ、馬をうち寄せたるに

五節

小忌の着る山藍の衣珍しくただ行きずりに今日は見よとや

(卷六・冬・四一三番)

従来、この歌の前にある散逸物語『御垣が原』の歌二首につづいて、これも同じ物語に登場する「五節」という女の歌とされてきたが、独立した物語と見る説に従う。ただし、詠者名が落ちていることになる。題号が「五節」だとして、臨時の祭の場面とどうかかわるのか。この祭は十一月に行われる賀茂の臨時の祭であろうから、五節の時期とは近接するが、それ以上の詳細については不明。

[18] 『ことうらのけぶり』

物思ひけるころ、琴に弾きける

異浦の煙の中納言の更衣

天少女月の都に誘はなん跡とどめじと思ふこの世を

(巻十七・雑二・二二八一番)

女が物思いをするのは、帝の寵が薄いことを嘆いているのであろうか。わざわざ身分を「更衣」として、ころに作意がありそうだが、『源氏物語』の桐壺更衣のように、帝寵の深さがかえって嘆きの種となる場合もある。題号「異浦の煙」が、ほかの人への愛情の移ろいを暗示するとすれば、素直に帝の愛情の移ろいを嘆いたと見るべきか。なお、女が琴を弾きながら、「天少女月の都に誘はなん」と詠む姿には、『夜の寝覚』冒頭部の中の君の面影もあるか。

[19] 『恋に身かふる』

同じ寺にこもりて、思ふこと叶ふさまに侍りければ

恋に身換ふる頭中将

あなたふと枯れたる木にも花咲くと説ける誓ひは今ぞ知らるる

(巻七・釈教・四九四番)

「同じ寺」は清水寺を指す。お伽草子『しぐれ』にほぼ同じ歌が見え、この物語を改作したものとされる。原作も同様の内容であったとすると、〈しのびね型〉の中編物語であったか。題号「恋に身かふる」は、恋が原因となって男が出家する意と見るのが通説だが、私見では、恋い死にすることをいうと考える。拙著『中世王朝物語史論 下巻』(二〇〇一年、笠間書院)所収「擬古物語とお伽草子の間——『あきざり』を軸として」を参照されたい。

## [20] 『きつき』

(題知らず)

五月の源大納言の女

死出の山しるべと頼むほととぎす夜にまどひたる声の聞こゆる

(巻十六・雑一・二一八六番)

女は、大納言の娘であるが、未婚なのであろう。あの世への道案内をしてくれるはずのほととぎすの鳴く声を、闇夜に迷っていると感じるのは、故人が亡くなってまだ間もない時期だからであらうか。亡くなったのが、恋人なのか肉親なのか、明らかでない。「ほととぎす」は、題号となった「きつき」の代表的景物である。五月に故人は亡くなったものか。だとすると、

きつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする (『古今和歌集』巻三・夏・一三九番)  
 の歌のイメージも揺曳する。

## [21] 『しづのをだまき』

思ふこと侍りて、初瀬にまうでて、なるべきさまの夢見侍りて、まかでける道にてよめる

倭文の苧環の左近の府生

佐保山の紅葉の錦たち出でてしるしを深く見るよしもがな

(巻五・秋下・三五一番)

題号「しづのをだまき」は、『古今和歌集』巻十七・雑上の、

いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりは有りしものなり (八八八番)

により、卑官の身の左近の府生が、願いごとがあつて長谷寺に参籠したところ、宿願成就の夢告を得て、喜び勇んで都へ帰ろうとするときの歌、ということであらう。「紅葉の錦たち出でて」には、錦を着て京へ帰りたい(故

郷に錦を飾る、朱買臣の故事)、という含みもあるか。だとすると、「思ふこと」というのは、立身出世の願いであったことになる。「いやしき」身にも「さかり」がくるように、と願ったわけである。また、「しづのをだまき」からは、『伊勢物語』三二段の、

いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな(二六三頁)

も想起される。左近の府生の歌の下旬「しるしを深く見るよしもがな」には、その下旬のしらべが移されている。すると、「思ふこと」とは、旧恋を復活させることも考えられる。物語としては、立身出世よりは恋を抜うのが常道だが、この物語の場合、どうだったのであろうか。

[22] 『せれふ』

早う住み侍りけるところの荒れにけるを、年ごろありて見てよめる

芹生の中納言

我が宿は鶉鳴く野と荒れはててあるじ顔なる虫の声々

(巻五・秋下・二九四番)

中納言という地位からは、まだ若い主人公像が浮かぶ。題号となった「せれふ」は、歌に詠まれる場合「大原や芹生の里」と表現されることの多い地名である。『とはずがたり』巻一に、「例の芹生の里、数へなどす」(『新日本古典文学大系』本五九頁)とあり、今様として謡われていたことが指摘されている。中納言の古里は、荒れ果てて「鶉鳴く野」となったというのだが、これを素直に芹生を指すものと見てよいかは、微妙なところであろう。「鶉鳴く野」とあれば、『伊勢物語』一二三段を典拠に、「深草の里」と詠むのが定型化しているからである。あるいは、



きて見れば鶉なく野と成りにけり住みあらしし深草の里『正治初度百首』秋・一八五二番・実房  
のように、中納言の古里も深草であつたのかもしれない。

[23] 『たい』

忍びて御覧ぜられける女のもとにて、暁、ほととぎすの鳴き渡るを聞かせ給ひて

たいの先帝の御歌

ほととぎす鳴きていづくに過ぎぬらん我のみつらきしのめの空

(巻十五・恋五・一〇七一番)

「先帝の御歌」とはあるが、歌を詠んだ時点では、帝であつたか、あるいは即位以前であつたか。忍んで逢つた女のもとで暁を迎えているのだから、即位前の若いころのエピソードと見るべきか。「先帝」とあるので、退位後に上皇とはならなかつたはずであり、在位中に崩御したものが、あるいは讓位後ほどなく崩御したものが、右とよく似た状況で詠まれたものに、次のような例がある。

忍びて御覧ぜられける女にたまはせける

女すすみの先帝の御歌

君があたりしばし離れぬ心こそ我が物からにうらやまれけれ

(巻十三・恋三・九三九番)

『たい』の歌は別れ際に詠んだもので、『女すすみ』のほうは別れたあとに贈つた後朝の歌であるという違いはあるが、いずれも「先帝」が「忍びて御覧ぜられける女」に対して詠んだ歌である。散逸物語『女すすみ』は、『風葉和歌集』に二二首という多数の歌が入集していて、複雑な人間関係がここでは展開する。したがって、物語全体を単純に比較するわけにもゆかないが、ここではさらに、「先帝」が崩御を前に、女と歌を詠み交わしたこと

が知られる。

御心地限りにおぼえさせ給ひけるに、いとせちにおぼされける女御にのたまはせける

女すすみの先帝御歌

はかなくも契りけるかな浅茅原葉末の露の常ならぬ世に

御返し

登華殿の女御

吹き乱る浅茅が露の風にまづ消え果つる我が身ともがな

(巻九・哀傷・六二八く六二九番)

最初の「忍びて御覧せられける女」が登華殿女御その人であったという保証はない。とはいえ、物語の大枠としては、愛する女を残して帝が崩御する、という共通点を想定することも許されよう。そうした展開を短編として描くならば、『我身にたどる姫君』巻七における悲恋帝の場合のような劇的なものも可能であろうが、詳細は不明である。

題号の「たい」は、「たひ」だとしても明解を得ないが、あるいは、同じく『女すすみ』を参照すれば、

先帝の御わざの夜よみ侍りける

女すすみの中將

限りあれば添はぬ煙をよそに見てなほ同じ世に立ちや返らむ

やがてかしらおろし、北山にこもりにけるとなん。

(巻九・哀傷・六六三番)

のように、先帝の葬送が行われて、そのおりの「荼毘」の煙をいうとも考えられる。ただし、漢語をそのまま物語の題号とするのも異例であり、これも適当とは思えないのであるが。

## [24] 『たまがしは』\*

男の絶え果てにければ、尼になりて侍りける髪を包みて、かの男の車の見えけるに忍びて入れさすとて、  
書き付けける  
たまがしは

浮き沈み恋ふる涙の海なれば今はあまとぞ我はなりぬる

(巻十四・恋四・一〇四四番)

『大和物語』一〇三段に、平中の熱心な懸想を受け入れて契った武藏守のむすめが、一夜来たきり、音信不通のまま五・六日が経過したため、自ら髪を切つて尼となり、切つた髪を紙に包んで平中に届けさせた、という話がある(『平中物語』三八段にも見える)。散逸物語『たまがしは』は、この歌物語をもとに、短編物語に仕立てたものではあるまいか。『大和物語』において女が届けさせた歌は、

あまの川空なるものと聞きしかどわが目のまへの涙なりけり(三四二頁)  
というものであり、平中は、

世をわぶる涙ながれてはやくともあまの川にはさやはなるべき(三四二頁)

と返事を書いて、その足で詫びを入れに女のもとを訪れたが、女は塗籠に入つて会おうともしなかった、という。題号「たまがしは」は、従来「玉堅磐」の意とされてきたが、あるいは『堀河百首』の次の歌(時雨・国信)によるものではなからうか。

み山べのしぐれてわたる数ごとにかごとがましき玉がしはかな(八九九番)

女の出家が、男には当てつけがましいものに映つた、というのであろう。軽率に出家をして、あとで後悔する女のこと、「帚木」巻の雨夜の品定めでも話題になっている。

従来は、この歌の直前にある散逸物語『御垣が原』からの連続しての採歌で、同じ物語に登場する「たまがしは」

なる人物の歌と見ていたが、独立した短編物語と判断してよいのではあるまいか。あるいは、同じく歌物語との関係の深い『はいずみ』の詠者表記が、「よみ人しらずはいずみ」（九七五番）となつていることからすると、もと「よみ人しらずたまがしは」とあつたものが、「よみ人しらず」を脱落させたものであろうか。

[25] 『つづらこ』

入り日を見待るとて

葛籠の式部卿の宮の北の方

極楽を思ひ遣りつつ今いくか西に入り日のかげを拝まむ

（巻七・釈教・五〇七番）

式部卿宮の北の方は、ちようど『無名草子』の冒頭部に描かれる老尼のような生活をしていたのであろうか。

・苔の袂乾く世なき慰めには、花籠<sup>はなご</sup>をひぢに掛けて、朝ごとに露を払ひつつ、野辺の草むらに交じりて花を摘みつつ、仏に奉るわざをのみして、……（完訳日本の古典）本二〇五頁）

・五月十日余日のほど、日ごろ降りつる五月雨の晴れ間待ち出で、夕日はやかにさし出でたまふもめづらしきに、……（二〇六頁）

題号となつた「つづらこ」は、摘んだ花を入れるためのもので、「花籠」と同じようなものであろう。

[26] 『露わけわぶる』

八月ばかり、女のもとにたたずみて、笛を吹き侍りける

露分けわぶる右大将

思ひ知る人に見せばや浅茅生の露分けわぶる袖の気色を

（巻四・秋上・二五二番）

物語の題号は、主人公である右大將が詠んだ歌に「露分けわぶる袖の気色を」とあるので、それに由来するのである。男は、仲秋、思いを寄せる女のもとを訪れ、浅茅の生える中を分け来たさいに濡れた袖を見て、思いの深さを察してほしい、と訴えている。女に笛を聞かせようとしたり、「思ひ知る人に見せばや」と詠みかけたるところからは、伊達男らしい余裕が感じられ、多くの物語の男たちに見られる必死さや焦燥感のようなものは、あまり感じられない。女は浅茅が宿に住み、たまさかの右大將の訪れを待つ身であったか。

[27] 『鶴のしるべ』

みかどにほのかに御覽せられ給ひて後、行方知られたてまつらせ給はざりけるころの手習ひに

鶴のしるべの中宮

いかなりし夢のなごりの覚めやらで今も乾かぬ袂なるらむ

(卷十四・恋四・九九五番)

のちの中宮が、帝との出会いののち、帝の前から行方をくまらず時期があり、その間、帝との契りを忘れられず涙にくれて過ごしていたが、再会して、中宮にまで昇ったという、女の栄達譚であろう〔2〕『あしすだれ』の項を参照。「鶴のしるべ」という題号から、男女の結びつきに「鶴」が関与していたようであるが、実際に鶴が登場するものか、めでたさの象徴としてなのかは、不詳。

[28] 『としあらそひ』\*\*

子どもの我も我もと年を乞ひければ

年争ひの母

群れるつつ千年争ふ鶴の子に我が万世を譲りてもみむ

(巻十・賀・七四六番)

『新後撰和歌集』巻二十・賀に、

鶴老争齡といふことをよみ侍りける

基俊

松の花十かへりさける君が代になにをあらそふつるのよはひぞ(二五七二番)

とあり(書陵部蔵『基俊集』四四番。歌題「鶴老争齡」)、「争齡」を訓読したのが「年争ひ」であろうか。また、『千載和歌集』巻十・賀には、

閑院の家にて、はじめて対松争齡といへるころをよみ侍りける

入道前関白太政大臣

千とせふるをのへの小松うつしうゑて万代までのとこそみめ(六二八番)

源通能朝臣

万代もすむべきやどにうゑつれば松こそ君がかげをたのまめ(六二九番)

ともあり、仁安三年(一一六八)正月二十八日、摂政藤原基房家において、「対松争齡」なる題のもと、人々が歌を詠んだことが、さまざまな歌集に記されている(『新勅撰和歌集』巻七・賀・四六〇番・権中納言兼光、『頼政集』三二三番、『重家集』三九二番、『長秋詠藻』二八一番、『有房集』八七番、『季経集』六三三番)。「年争ひ」物語では、母の長寿を子どもたちが挙つて祝う場面が描かれたのであろうが、何歳の賀であったのか。例えば、『増鏡』や『とはずがたり』に見える北山の准后の場合を参考に九十歳だとすると、子どもたちも相当の高齢となつていたはずである。「群れるつつ千年争ふ鶴の子」とは、そうした子どもたちの様子をいうか。老人たちが、大老人の算賀

にあたって、なおも長寿にあやかりたいとする物語であろうか。祝言性のある短編物語であったか。

[29] 『鳥のねうらむる』\*

忍びたる男の出でける暁、「しばしと鳴かぬ鳥のねぞうき」といひ侍りけるに

鳥のね恨むるの兵部卿のみこの女

(卷十二・恋二・八七三番)

うたたねの夢路に迷ふ明けぐれに覚めて消えぬる我が身ともがな

男の詠んだ歌の下旬は、『人家和歌集』卷八に、法印実伊の歌として見えるものと一致する。

きぬぎぬのつらきわかれのあか。月をしばしとなかぬ。とりのねぞうき。(八一番)

実伊は、『続後撰和歌集』以下の勅撰集に、二八首が入集する歌人。偶然に下旬が一致しただけであるのか、物語との間になんらかの関係があるのか、不明である。男が別れ際に「しばしと鳴かぬ鳥のねぞうき」と詠んだのが、すなわち「鳥のね恨むる」という行為であったとすれば、かれが主人公であり、物語のクライマックスの場面からの採歌と見られる。女の歌には、「若紫」巻の光源氏の絶唱、

見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな(①三三二頁)

の影が色濃い。「若紫」巻の光源氏と藤壺の贈答は、『風葉和歌集』において、この歌の前に、後出[40]『ゆるさぬなか』の歌一首をはさんで、配列されている。人目を憚らねばならぬ男女の仲を描いた短編であったか。

[30] 『なでしこ』\*

なでしこの大夫、父の大将に知られ侍らざりけるころ、ただかくといひてんと内侍のかみにのたまはせ

てよませ給ひける

なでしこの院の御歌

なでしこを思ひ出づらん草むらに露かかりとも知らせてしがな

(巻十六・雜一・一一九一番)

実父である大将が知らないのに院が大夫の素姓を知っているというのは、大夫の実母(すでに逝去したものと院とが、特別な関係だったからであろう。また、わざわざ院が尚侍に相談していることからすると、尚侍も事情を知っていたことになる。この歌が大将に伝えられたことで、大夫は実父に引き取られ、物語の最後では成人し、五位に叙されたのであろう。詞書に「なでしこの大夫」とあるので、物語中に愛称として、幼少時から「なでしこ」と呼ばれていたものか。その子の処遇をめぐる物語ということ、なでしこ」と命名されたのであろう。

『源氏物語』の玉鬘を男子に変えたような設定、と見ることもできる。だとすれば、「帚木」巻の夕顔の歌、

山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露(①八二頁)

のように、わが子を案ずる実母の歌があつたか。なお、院と尚侍との関係が判然としない。帝と尚侍であれば、男女関係にあると見るのが自然だが、ここではどうなのであろうか。

[31] 『ぬりごめ』

女の見えぬべしやと、塗籠に入りて侍りけれど、見えざりければよめる

塗籠の少将

影見えぬ人を恋ふればいとどしく暗き闇にもまどはるるかな

(巻十一・恋一・七七一番)

残されたわずかな情報からも、題号の由来、男女の関係性が、ほぼ想像できる。男が少将であることも含めて、短編であると見て、まず間違いあるまい。「塗籠」は、男女の際どい関係を描くさい、印象的に利用される室内



空間である。『源氏物語』では、「賢木」巻や「夕霧」巻での出来事が想起される。垣間見のため、果敢に塗籠に忍び入るまではよかつたが、目当ての女の姿は見えず、なにも知らない女房が入り口に錠を差すかなにかして、出ようにも出られず、真つ暗ななかに閉じ込められて途方にくれる少将……といったことで、滑稽味のまさった短編であつたか。

[32] 『はがため』

題知らず

はがための侍従

花の枝にはやも鳴かなむ鶯の声につけてぞ春も知らるる

(巻一・春上・二六番)

春の到来も、鶯が梅の枝に来て鳴いてこそ実感される、と侍従が詠む。題号である、正月の「齒固め」の行事のさいに詠まれたものか。侍従は、女房名である可能性もあるが、主人公の官職であるなら、やや卑官との印象がある。現存『住吉物語』の主人公が四位少将として登場するのに、散逸古本では「侍従」であつたらしいことからすると、侍従を主役とするのに抵抗感のなかつた、『源氏物語』以前の成立と見ることもできる。あるいは、祝言性のある物語であつたか。

[33] 『はこやのとじ』

照満姫取り返され給ひてよませ給ひける

はこやのとじの太玉のみかどの御歌

いへどいへどいふに心は慰まず恋しくのみもなりまさるかな

(巻十四・恋四・九七七番)

『源氏物語』「蓬生」巻に、末摘花の心やりの物語として列挙された三つのうちのひとつである。そこに見える『竹取物語』の入集歌が三首であるから、それよりはポリュームの小さい作品だったのであろう。『実隆公記』延徳三年（二四九二）二月九日の条に、「今日、箱屋刀自物語書写、則終功了。」と見えることが知られ、その頃までは伝存していたのであり、一日で書写できるような分量であったことが知られる。神野藤昭夫著『知られざる王朝物語の発見 物語山脈を眺望する』（二〇〇八年、笠間書院）第二章において、詳細に検討が尽くされているので、参照されたい。

[34] 『花ざかり』

内よりまかでさせ給ひけるに、みかど、「身を分くるものならませば」と聞こえさせ給ひければ

花盛りの中宮

もろともに眺むる宿は変るとも同じ雲居の月をこそ見ぬ

（巻十七・雑二・二二五九番）

帝と中宮（詠歌の時点では女御であったか）とのこまやかな愛情の交流がしのばれる物語である。題号「花ざかり」は、そうしたふたりのむつまじい関係の比喩であろうか。帝が、ことさらに「身を分くるものならませば」——わが身を二つに分けたい、の意——と訴えたのは、里下がりが長期間にわたるからであろう。出産のための退出、ということなら、その後に皇子誕生があり、まさに「花盛り」を迎えたことになる。

[35] 『花のしるべ』

（題知らず）

花のしるべのつま君

物思ふといふは何とも知らざりき袖に涙のかかるなりけり

(巻十一・恋一・七六三番)

恋のつらさをはじめて経験した、と嘆く「つま君」の歌であるが、この人物が男なのか女なのかも、明らかでない。題号「花のしるべ」は、花のもとへの道案内、の意であろう。

[36] 『人にかはれる』

親の守りていと逢ひがたかりける女のもとに、忍びて遣はしける

人にかはれるの大將

見し夢をいかにしてかは語るべきあひ見んことのこの世ならねば

(巻十四・恋四・一〇〇一番)

大將は、女と契りをもつことはできたのだが、親の監視が厳しく、今生での逢瀬は断念するほかない、とまでいう。詠者表記が「人にかはれるの大將」とあるので、大將の思うにまかせぬ恋にはなく、大將との結婚にあくまで反対する親の側に照明が当てられていたか。娘の恋愛に親が関与してくるのは当然とはいえ、身分ある男の求愛をも拒む親の態度が尋常でなく、それが「人にかはれる」ものであった、というのであろうか。だとすると、『人丸集』に見える次の歌は、大將の嘆きをそのまま詠んだかのようなのである。

人ににず、さが、なぎ、おお、やの、心ゆ、えち、ごさへに、くく、おも、ほゆる、かな (二六九番 国名「えち」を詠み込んだもの)  
相手の女は「ちご」とはいえないが、「人に似ず性なき親の」せい、好きな女に対してまでも、恨み言をいいたい心もちであった、ということになる。やや滑稽味のある短編であったか。ただし、「人にかはれる」という表現そのものは、人と違って変わっている、という意味に用いうるかどうか、やや不安なところもあり、誰かの代わりとなっている、の意に解するほうが自然に思われる。歌集の詞書にしばしば見える、「人にかはりて(よめ

る」の類であるが、その場合どのような物語となるであろうか、にわかに想像がつかない。

[37] 『ふきこす風』

山里に侍りける女のもとに、雪の降る日遣はしける

吹き越す風の宰相中将

寂しやと思ひこそやれ雪深き深山の里の雪の気色を

(卷六・冬・四三九番)

宰相中将は青年貴公子のイメージであるが、山里に住む女のもとに通っているであろうか。雪の日、自らは訪れないが、今ごろは雪に埋もれているであろう女の住まいに、見舞いの文を届ける。題号「ふきこす風」は、山を越えて吹く風であるが、例えば、

花の香を吹きこす風にさそはれよ山のあなたのをちの里人 (『百首歌合建長八年』二百六十九番左・三位中将・五三七番)

のように、女が都に出てくることを慫慂する気持をこめるか。

[38] 『ふくらすずめ』\*\*

前斎院に、山吹のえならぬ枝につけて聞こえ侍りける

ふくら雀の左大臣

くちなしのこはえもいはぬ色なれどきてしもいか山吹の花

(卷二・春下・一二〇番)

山吹の花に託して(言はで思ふ)恋心を訴えるというのだが、それが、左大臣という高位の者の歌であるところ

ろに、やや違和感がある。若いころの話ということであろうか。そうすると、左大臣にまで昇進する経緯も、物語の内容に含まれることになる。もつとも、『在明の別』後半部の主人公のように、二十歳にもならないうちに左大臣に昇つてしまい、その官職のまま物語が終わる例もある。また、歌を贈ったときの相手が、齋院になる前なのか、在任中なのか、退下後なのかによつても、状況が変わつてくる。齋院になる前だとすると、この物語では少なくとも二回御代変わりがあつたことになり、若き日の左大臣は、『狭衣物語』の主人公よろしく振る舞つているように見える。狭衣は、源氏の宮（のちに齋院となる）が山吹を手を取つたことによつて、

いかにせむ言はぬ色なる花なれば心のうちを知る人ぞなき（新潮日本古典集成）本⑤一〇頁

と、思いを伝えられない苦衷を託つていたのであるが、左大臣は、「くちなしのこはえもいはぬ色なれど」と、まさに狭衣の歌を反転させることで、「さてしもいかが山吹の花」——「いかが止まむ」との掛詞（口無しのままでは終われない、の意）であろう——と、思いを訴えることができたのである。しかし、女はその後齋院になつたのだから、この恋はかなわなかつたことになる。それに対して、在任中の齋院に言い寄るといふのはやや考えにくいので、退下後だとすると、光源氏と朝顔姫君との関係が思い合わされる。

「ふくら雀」という題号もユニークであるが、内容とどうかかわるのか、想像がつかない。かの「若紫」巻では、雀の子を逃がしてしまつたわけであるが、そのまま飼いつづけていると、よく馴れて、ふつくらと可愛い成鳥になつた、といったエピソードでもあつたか。あるいは、冬の寒さに羽毛を膨らませた雀の姿を見て、なにかを思いよそえるようなことがあつたか。

[39] 『ふせや』

心にもあらず古里を離れてさすらへけるに、初雁の鳴くを聞きて

伏屋の関白の北の方

かりがねよしばしとまりて旅の空恋鳴く方の物語せよ

(巻八・羈旅・五八七番)

お伽草子『伏屋の物語』が、原作の面影をとどめる改作物語であると見られる。(継子いじめ譚)のひとつで、中編程度のものであったか。

[40] 『藤のうらば』\*\*

忍びたる女のもとに、ちごの出できて侍りけるを、人のものに聞きて遣はしける

藤の裏葉の右衛門督

人知れず思ひこそやれなでしこのよそに標結ふ花の姿を

(巻十六・雑一・一一九〇番)

忍んで通う女が別の男と結婚したため、産まれた子どももその夫の子として遇されていることを知った右衛門督が、親子の名乗りを挙げられない苦衷を歌にして、女に贈ったものである。『源氏物語』の巻名でもある「藤のうらば」なる題号をもつが、右衛門督という官職が「若菜上」巻以降の柏木のものであること、詞書の内容も、女三の宮との密通、薫の誕生、光源氏の子としての処遇を思わせるなど、ことさらに意識して作ったものとの感がある。『源氏物語』の巻名は、『後撰和歌集』所収の「はる日さす藤のうらばのうらとけて」の歌(巻三・春下・一〇〇番)によるものであるが、ここでは、すでに指摘のあるように、もとは『万葉集』に見え、『綺語抄』や『古来風体抄』に引く、次の歌によるのであろう。

春べ咲く藤の末葉のうら安にさ寝る夜ぞ無き子ろをし思へば（『古来風体抄』一六三番）

第五句「子ろをし思へば」が、「なでしこ」を「人知れず思ひ」やる男の姿と重なる。題号のありかたを含め、『源氏物語』のパロディ的短編であろうか。

あるいは、同じく『源氏物語』の玉鬘を、のちに自分の娘だと知らされた頭中将を意識したような設定であったとも見られるか。「常夏」巻に、光源氏と玉鬘との間で、次のような贈答が交わされている。

な、で、し、こ、の、と、こ、な、つ、か、し、き、色、を、見、ば、も、と、の、垣、根、を、人、や、た、づ、ね、む

山がつの垣ほに生ひしなでし、このもとの根ざしをたれかたづねん（③二二三頁）

玉鬘の歌は、[30]『なでしこ』に引いた「帚木」巻の母夕顔の歌と、遙かにひびきあっているが、雨夜の品定めのおり、頭中将によつて語られた「痴者の物語」（①八一頁。「いと忍びて見そめたりし人」との間に「幼き者などもありしに」[八二頁]、「跡もなくこそかき消ちて失せにしか」[八三頁]と語られていた）のその後を、『源氏物語』のように大々的ではなく、コンパクトにまとめた短編とも見られよう。

#### [4] 『みこかへ』

（詞書脱落）

みこかへの内侍のかみ

岩橋に劣らぬ中の途絶えをばたがづらきとか思ひわたらむ

（卷十三・恋三・九六九番）

尚侍が、あなたの薄情さのためにふたりの仲は絶えたのだと、男を恨めしく思っている歌である。女が尚侍となることから、〈しのびね型〉の物語であったかとする意見もある。

[42] 『みことかしこぎ』

みかど、隣の国へ出で立ち給ふに、御衣調じて奉るとて、袂に結び付け給ひける

みことかしこぎ后

別れ路は唐錦にもあらなくにたたまく惜しき旅衣かな

(卷八・離別・五三六番)

「大君のみことかしこみ」は『万葉集』に頻出する表現であり、綸言を尊重する后を女主人公とする物語であろうか。「みかど」が隣国に出征するというのは、日本を舞台とする物語としては考え難いことなので、中国を舞台にした異国物の物語であったか。あるいは、神話の時代を舞台に、倭国統一を背景にした物語であったか。

[43] 『ものねたみ』

(題不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>)

ものねたみの登華殿御息所

ともすれば思ひ入江のあやめ草うきねを掛くる身こそつられ

(卷三・夏・一六五番)

題号「ものねたみ」は、後宮での后妃たちの嫉妬をいうか。登華殿御息所は、嫉妬する側なのか、される側なのか、判然としない。「うきね」には「憂き寝」が掛けてあり、帝の御寝に侍することのないわが身を嘆いているか。

[44] 『やまぶぎ』

山吹の盛りなる所に立ちとまりて侍りけるに、内わたりにて見侍りける女のもとなりければよめる

山吹の三位中將

言はねども八重の山吹九重にをりしほどより思ひそめてき

(卷二・春下・一二一番)



三位中将を主人公とするこの物語については、かつて少しく検討したことがあり、題号「山吹」からは、「言はで思ふ」恋を主軸とする物語であると規定」でき、「男女の再会譚を骨子とした短編物語ではなかつたか」（前掲拙著所収『八重葎』覚書——『狭衣物語』題彰の物語として——一〇三頁）と推測した。

## [45] 『ゆふぎり』

女に遣はしける

夕霧の二のみこ

落ち積もる涙は袖に氷りつつ解けて寝らるる宵の間もなし

（巻六・冬・四〇二番）

第二皇子は、寒夜、あなたを恋しく思つて眠ることもできず、こぼれ落ちる涙も凍りついてしまった、と女に訴える。ここでも『源氏物語』の巻名とかぶる題号〔14〕『紅梅』、〔40〕『藤のうらば』の項を参照）が与えられているが、その意図は不明。

## [46] 『ゆるさぬなか』

年を経て思ひわたりける女に、忍びて物申して侍りけるあしたに

許さぬ仲の中納言

そのままの夢路にやがてまぎれなで逢ふにし換ふる命なりせば

（巻十二・恋二・八七二番）

中納言が、長年思いを寄せてきた女との密会を遂げて、別れ際に詠んだ歌である。「物申して」とあることからすると、相手は高貴な女（帝妃か、皇女か）であろう。ここでも、「若紫」巻の光源氏の歌、「見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな」の影が色濃い〔29〕『鳥のねうらむる』の項を参照）が、「夢の中

にやがてまぎるる」程度の中途半端なことではなく、この逢瀬と引き替えに死んでしまえばよかった、とまでいう。男が中納言という官職にとどまっていることからすると、題号「ゆるさぬなか」が示唆する禁じられた恋の一线を越えるところに、物語の山場があったと考えられる。ただし、「ゆるさぬ」の具体的な内容については、詳らかでない。

[47] 『よつあし』

男の、「唐衣重ねばいかにうれしからまし」といへりける返り事に

四つ足の大臣のむすめ

よそながら思ひはそめよ唐衣重ねば返る色もこそあれ

(卷十一・恋一・七八六番)

ある男が、大臣の娘に逢瀬を求める歌を贈ったところ、契ったあとに心変わりされるのは嫌だから、他人の關係のままいつまでもわたしを思っていてちようだと、すげない返事であったという。題号の「よつあし」は四つ足門で、大臣家の格式ある門を指すとすれば、権門の娘であることを笠に着て居丈高に振る舞う娘を、揶揄するようなところのある物語でもあったか。ただし、「唐衣重ねばいかにうれしからまし」のごとき無骨な男の求愛を、女がまともに取り合ってくれるはずもないのであって、返歌があった分だけ、まだ脈はあるのかもしれない。いずれにせよ、大臣の娘という身の上のまま、結婚にまでは到らなかつたのであろう。

[48] 『世をうちがは』

頼みたりける人を、行方なきさまに人のもてなし侍りけるに、伴ひてよめる

## 世をうぢ川の淡路

露の身を四方の風の誘ひ来ていづれの野辺に置かんとすらん

(巻十七・雑二・一三二四番)

お伽草子『若草物語』の一本(慶應義塾図書館蔵写本)に、女主人公若草の乳母である淡路の歌として、ほぼ同じ歌が見出され、この物語を改作したものと見られる。その一本には、女主人公の遺詠として、

いかにしてふるさと人につげやらんみを、うぢが、はにしづみはてぬと(室町時代物語大成第十三)所収本六四一  
 六四二頁)

の歌が見え、それを主人公の少将が、後日発見することとなる。原作も似たような展開であったとすれば、短編というよりは、(し)のびね型の中編物語であったかと思われる。

## [49] 『われはづかしき』\*

秋の夕べ、母の箏の琴を弾き侍りけるを聞きて、さしもあらぬだに筋は絶えぬものなるに、などか、と  
 関白の聞こえ侍りければ 我恥づかしきの女院

まだ知らぬ松吹く風の声にさへ秋は憂き身にまづぞ聞こゆる

(巻十六・雑一・二二〇番)

母の箏の腕前を受け継いでいないと、父関白から嘆かれた娘が、物語の最後には女院にまでなっているのだから、その後の紆余曲折と時間の経過が想定され、単純な短編とは考えにくい。題号「われはづかしき」が、母の箏の腕前を引き継げなかった自分を恥じ入る意であれば、詠者表記は「われはづかしき女院」のほうが適当である気もするが、どうであろうか。

[50] 『をのへ』

(題不知<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>)

尾上の按察大納言家の少大輔

音に聞くこや姨捨の月ならむ見るにつけつつ物ぞ悲しき

(巻四・秋上・二七四番)

按察大納言の姫君に仕える小大輔という女房の歌。いうまでもなく、名高い「をばすて山にてる月を見て」の歌(『古今和歌集』巻十七・雑上・八七八番、『天和物語』一五六段ほかにも所見)によるものであるが、女房としての私的な感慨というのではなく、主人である姫君の「わが心なぐさめかね」る状況への、同情・憐憫の思いを詠んだものである。題号「をのへ」は、『古今和歌集』巻十七・雑上の、

かくしつづ世をやつくさむ高砂のをのへにたてる松ならなくに(九〇八番)

に抱るとすれば、姫君をはじめ按察大納言家の人々は、不如意な現状に甘んずるほかないと、諦めの心境であったか。人々の嘆きの原因には、いづれ男が関係しているであろうが、詳細は不明。

以上、『風葉和歌集』所収の散逸物語のうち、短編である可能性が高いとの予測のもと、入集歌一首の物語五〇作品すべてについて、ひととおり検討を加えた。前稿でも述べたように、それぞれがきわめて断片的な情報しかもたず、具体的な内容の復元というにはほど遠いうえ、繁簡よろしきを得ない記述ともなったが、それでも多彩な短編物語の世界が広がっていたらしいことは、十分に窺えたようである。

個々の物語については、なお、新たな手がかりを求めて検討すべき点も多いであろう。また、『風葉和歌集』に二首以上入集している物語についても、短編とみたほうがよい場合も想定され、さらに検討の対象を広げる必要もある。それらについては、稿を改めて考えてみることにしたい。(二〇〇九年一〇月稿)